



Title	対談『清朝考証学の研究』（上）
Author(s)	加地, 伸行; 近藤, 光男
Citation	中国研究集刊. 1989, 7, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60904
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

対談『清朝考証学の研究』（上）

著者 近藤光男
読者 加地伸行

加地 それでは、始めましょうか。まず、第一篇・第二篇とありますこの御本の全体の構成なんですが、第二篇は「その典型を見るについては、ここから誰一人をもとりこぼしてはならない。また一方、余人を安易には一人としてここに加えるつもりはない」（三頁九行）と。恵棟と錢大昕と戴段二王と。ま、阮元は入つてますけど。それでよろしいですか。

近藤 ええ。じゃあ、第一篇は何を考えたかということでござりますけれども、清朝考証学を考える具体的な手続として、全くの布衣に終つた江藩が書いた『國朝漢學師承記』。一方は、乾隆帝の威容をもつてできた『四庫全書』と。

加地 対比。

近藤 『四庫全書』をほとんど全部扱つた紀昀、これが余人に当たる。

加地 うーん、おもしろいですね。

近藤 ということで、清朝全体を見たいと。それから、もう一つ。読者に、私の本全体の趣旨を知つていただくために、「清

朝漢學のかたち」を最初に置きました。清朝の水準の高い學問では、「述べて作らず」の精神における祖述が尚ばれる。もつとも「作らず」と言いながらも、そこにやはり文学意識があり、実は「作り」もするけれど、しかしそれは祖述という根柢を失うものではないと、大体そんなことを。僕のこの本の立て方つていうのは、所詮、今まで発表したものを集めたに過ぎないけれど、しかし、どういう資料を選択するか、あるいは、どういう資料を取らないか、そして、それをどう配列するか。黙つて並べておくだけとなるべく議論はしない、説明しない。

加地 微言大義ですね。（笑）

近藤 まさに。第一篇はどういう意図で構成したかはいわない。それが清朝漢學のかたちであり、方法である。（笑）

序説

加地 「洗練された言語感覚と鋭敏な文学的直観とが、『經』の文字に潜む古聖賢の思想の深奥を探り当てるのである」（二

頁倒数三行)と。こういうふうにトータルな形で清朝考証学を把えるということを、こういう表現でなさったのは先生が初めてじゃないですか。

近藤

これは私自身のことばのつもりです。ま、しかし、恐いのは後で吉川先生のものを読んでも、「あ、ここにあった」つてのがよくありますので。

加地

いや、それはいいじゃないですか。類比的にいいましたらね、戴震がね、吉川幸次郎ですよ。

近藤

ああ、そうですか。

加地

そしてね、段玉裁が先生ですよ。(笑)

近藤

いやーもう、穴があつたら。いや穴を堀つて入ります。

加地

熱情あふれるあの戴・段の関係。先生の書かれているところ(戴震と段玉裁ーその手跡をめぐつてー)三六八頁)、そのイメージがパーッと出て来たんですよ。師匠さんに対しても、先生のそのお気持ちが無意識のうちに投影したのかなあと思つて、非常におもしろかつたですね。で、先ほどのお話へ続きますけれども、「余人を安易には一人としてここに加える気はない」と。こうなりますとね。(笑)やーこれは厳しいなと思つまして。で、先生、いわゆる「証無くんば信ぜず」(五頁)といふ、これが実証主義なんでしょうか。

近藤

さて、ここが恐い。哲学の方の、厳密な哲学用語の使い方を知らないで使つてゐるかもしれないのです。加地、「証無くんば信ぜず」といった場合、証が出て来ない場

合はもう、疑いを残すという形だけ、となるんでしようか。近藤 と思ひますね。ただその、推論つていうのがおもしろい。推論というのも一種の証だと、これちよつといい過ぎかもしませんけれども。

加地 ここですね。実証主義の大問題点は、全てに渡つての証拠なんて、あろうはずがないんですね。資料と資料との間に、必ずジャンプがある。推測ですね。推測して証拠をつないでいくわけです。

近藤

「不連続の連続」。

加地 そのジャンプしているところは証拠ないんですね。実証主義がとことんいくと懷疑主義に陥る。徹底した実証主義者は何いえなくなつてしまつ。それから、「文字の研究→言語の研究→古聖賢の心の把握」(六頁八行)と、こういう形で考証学、清朝考証学を全体として把える。

近藤 戴震が解説している、と。

加地 清朝考証学といえば、いわゆる考証に没頭せしめて、政治的なところから目をそらしたんだとか、明学のムチャクチャな勝手気ままな議論に対する矯正といいますか、だいたいそういう教科書的な理解がありますですね。そういうのとは違うんだ、というところが、やはりいちばんおつしやりたかったわけでしょうね。

近藤 ええ、そんな理解では困る、と言いたいのです。ただ、この「文字→言語→古聖賢の心」ですねえ、戴震はやっぱり、

これをタテマエでいっている、実は、ホンネは東原先生これをひっくり返している。順序を。加地 なるほどねえ。その飾りつけのために、前にこう置いてる、と。

近藤 だからこう、何か、人に説く時はこれ少しも間違っていない、こうでなくちゃいけない。これをもし守らなかつたら学問でなくなる、論文も書けない。(笑) だけど、実はこういう順序を作るために、生きた人間の精神構造の中では、この順序を逆にやつてる。古聖賢の心はこうに違いない、と。そうすると、この言葉はこういうことをいつてゐるに違いない、この文字の意味はこうであるに違いない、と。

加地 逆にね。結論がまずあって。この件、後でもう一度議論しましよう。

第一篇

『国朝漢学師承記』と江藩

加地 『漢学師承記』、最近はほとんど読まれていらないような気がするんですね。

近藤 かつては中哲の大事なテキストだったようですね。神田の書店街にゴロゴロしてました。石印本に書き込んだやつが。加地 先生は『漢学師承記』の文は読みやすいとおっしゃつておられますね。でも逆にね、読みにくいところもあるんじやないですか。

近藤 結論から先に言いますとね、駢文の方が古文より読みやすいという前提があるからです、私に。駢文なら四字句のリズムにそろえて、圧縮した形にしておいてくれるのに対して、古文だと、どこで句読を切らうか、つてことになるかも知れない、というような。

加地 この『漢学師承記』の文章はコンパクトであるが故にですね、具体的な事実の問題につきましては、四〇頁に並べておられるの見ても、原文の方がわかりやすいんじやないですか。(笑)

近藤 こりやまあ、困りましたね。

加地 原文と並べたらですけども、かなりコンパクトに。ちょうど『宋元学案』なんかのね、あれなんかでも非常にカットしどんですねえ、伝をですね。

近藤 ええ、常にそうですね。

加地 省略してあるでしょ、途中飛ばしてますからね、時間的な経緯が飛んでるんですから、だから『漢学師承記』の場合にも、わかりやすいのかわかりにくいか、ちょっと私にはわかりにくかったですが。それから「戴震のリズムは、狂つたりズムでまとまっている」(四二頁七行)ってのは?

近藤 これ、実をいうとねえ、倉石先生のおことばですなあ。よくおっしゃつたもんですから、ついそのまま「狂つた」というのはちょっとといい過ぎだつたかな。(笑) 「一日。見」以下ですけれども、ここに莫大に長い句がありますでしょ。そのあと、

「周礼を徵引し」とここで四字句が出て、「之を奇とす」とばんと終る。こういうのがリズムが狂うということかと、私、勝手に理解し、ここで実例に引いたわけです。

加地 ああ、そうですか。こういうところは不思議な感じをお感じになられるわけですか。そうしますとですね、このリズムのことなんですが、例の韓愈らの古文復興運動がありますね。

六朝時代の駢文はやはり貴族の文章だらうと思うんです。高い知識と深い教養とが必要ですね。ところが唐代になつて韓愈が古文を出して来る。これやはり、科挙制度で成り上つて来た連中が、自分のことばをね、持ち出して来たんじゃないかと思うんです。白楽天なども俗語を混じえていくというスタイルですね。そうすると、駢文に対して韓愈・白楽天という古文やら俗語を用いるというような形で、自分のことばを科挙出身者が持つて来たんじやないか、と私は思つてゐるんです。その時代のことばを持つていたと思うんですね。そうすると、清朝の人達が、自分達のどういう文体、ことばを持ったか。それは駢文でしたということになつてゐるんですね、御説明だと。

近藤 学者は、ですね。

加地 その学者の駢文の意識というのは、どういう意識なんでしょう。このことば、自分達のことばとしてならば、どういう結びつきがあるんでしょうね。

近藤 努めて口語的に書こう、つてのと反対の方向に行つてゐるわけでしょうね。

加地 非常にこう、ハイレベルな文章ですね。

近藤 はい。専門家中でのことば。駢散文というよびかたがあるようですね。『文選』の駢文に対して、清朝の学者達が書く駢文的な文章は駢散文と。

加地 なるほど。駢文的なスタイルを持つた散文という形ですね。

近藤 はい。駢散文、それがその「言不尽意」、『易』の「言は意を尽さず」ですね、それでは困る、尽さないところを補填するはたらきのあるものとして駢文を考えていたんじゃないか、と。

加地 ところがですね、清朝考証学で論理的な問題を扱つている場合、駢文よりは古文の方が自由にきつちりと物がいえるような氣もするんですけども、そうじやないですか。

近藤 ええ、それもわかりますけれども、たぶん古文には無駄が多いと考へてゐると思います。だから、古文的でも結構なんですかれども、努めて無駄のない文章を書こうとしたのが清朝の学者達ではないか。

加地 なるほどね。

近藤 私、全然不勉強な方面の、例の桐城派の古文、清朝でも桐城派の人達、ああいう人達が書く散文と、それから、それこそ錢大昕、今の地震でも結構なんですが清朝一流の学者たちが書く文章とでは、かなり違うと思うんですね。

加地 いつの時代でも自分達のことばっていうのを持つてゐる

と思うんです、主流は。そういう意味でも、清人の考証学者達が持つていて駢文の意識というのを、いつか、どこかでお書き下さるとたいへんありがたいですけれども。ところで、ふつう『漢学師承記』といいましたら、学問史、学説史の内容としてしか把えないものを、先生がこういう形で、文学としての『漢

学師承記』というのをお扱いになる。これ、始めてですか？
近藤 ええ、まあ始めてなんていうのは恐いんですけれども、誰かの真似ではございません。

加地 こういう形で見ていけば、中哲関係の文献といわれるものも、新しい角度が出てくると思いますね。我々としては非常にありがたい分析と存じます。

近藤 ありがとうございます。
加地 それから、晥派は礼学であり、呉派は易学である、といふことです。（五九頁倒数三行）これ、おもしろかったです。やつぱり、礼と易とではだいぶ違いますよね。

近藤 なるほど。
加地 礼の学は、やつぱり実証主義ですよ。
近藤 はい。名物制度の学ですからね。

加地 で、易はこれやはり、議論の学であり、学派の好みが、経書の選択に出る、という感じがしました。これ、私あつと思つたですね。易と礼というのは、ちょうど対照的な感じ、思考法ですね。易では名物制度を考えようがない、あつたつてそれを加えようがない、大勢に影響がない。これは、経書の選択と学派

との関係という意味で、非常に勉強になりました。

四庫全書と紀昀

加地 えーと、四庫全書と紀昀の学問とは、さきほど大体、狙いをお話し下さったので。つまり、四庫全書なるものの総体を紀昀を通じてお考えになる。

近藤 紀昀は總纂官としてなかなか持平の論をする。公平だった。彼は宋学がたとえ嫌いでも、公務として四庫全書にはきちっと価値のあるものは入れる。だけど、『閱微草堂筆記』の中で彼の作る小説のお蔵には断固入れない、と。そういうおもしろさがあったと思います。紀昀の学問も結構そういう点で、まさに四庫全書にはふさわしい人物だったな、と。決して考証学の典型として、紀昀の姿から考証学の姿を見ていただきたくはない、ただこうとは思わないけれども、だけどやはり、こういう人物がいた。

加地 この九〇頁のところ、私は非常に勉強させていただきましたが、二行目からですね。「經香」ですか。それから、七行目の「その一字一句から濃厚な香を発する。これこそ經香閣の名のいわゆるのである、云々」とありますね。で、私はつと思つたんですけれども、代々の学者の家を「書香家」といいますね。文字の持つている本来のことばのにおい。

近藤 あ、なるほど書は文字ですね。
加地 それから、まさに本の持つている物的なにおいといいますかねえ。読んでまして、書香家ということば、こういうのと

関係あるのかなとあつと思つたんですけど。
近藤 ごく近い過去まで、実感があつたでしようね。今の若い人に書香家って言つたって、ピンとこないかもしませんけれども。

加地 薬の香しますもん。本を開けたら墨の香なんかも、ぱーっとね。古いもんでしたら、開けた時に墨の香がします。ところで、九一頁なんですかとも、『周礼』お好きなんじやないですか。あんまり関心ないですか。（笑）

近藤 『周礼』が何かに引かれてまして、孫詒讓の『正義』を

加地 開きますと、うわあって思います。（笑）ただ、ついでに言っておきますと、あれは清朝考証学の最盛期の時期を過ぎたものなんですね。

加地 ああ、そうですか。

近藤 ついでに、重要なことつていうと大げさですが、あの『周礼正義』をですね、もし乾嘉の学者が書いてますと、もつ

と簡潔なものにしたはずです。

加地 はあ。あれはつまり考証学のデカダンスですね。徹底的に考証そのものに行つた結果なんでしょうね。古人のことはもううどうでもいいわけなんですね。（笑）

近藤 そういうところあると思うんですね。愈樾あたりまでいきますとですね。私は、集英社の漢文大系『戦国策』の作業をしたとき感じました、あることばについての考証が……。

加地 横へ……。

近藤 王引之・王念孫がやつてくれると、もうみんな取らざるを得ない。俞曲園先生のは、一生懸命読んで、待てよ、取ったものか、やめたものか……と。

加地 判断がむつかしい。

近藤 やはり、清末の学と乾嘉の学との違つていうのが、いみじくも今出た……、デカダンスとして、うわーっとやつてあっても、こつちが熱心に読んでいけば然るべきところを拾えればよろしいわけですからね。だから、やっぱり役に立つと思うんですね。

加地 そりやそうですね。で、話としては、先生の今回のとは、

ずれるとと思うんですけども、『孝經』の問題で「孝經はもう論じない、云々」（九六頁）とあるんですけども、これは。

近藤 ここはぜひ教えていただきたいとこですよ。何かこれ、書いた時にちょっと不安なままで書いた覚えがある。何でしょうか。

加地 宋学の場合は孝はもちろん大事な問題ですけども、例の『論語』、「仁を為すの本」と読め、と変えましたよね。ああいうふうに、孝は大事なことですけれども、そこから始まつていくという形になつていく、ということも『孝經』の位置づけ、重んじなかつた理由になつてくるんじやないかと思うんです。もちろん、孝というのは大事なことですけれどもね。それで、孝から始まるという形で、孝は最終ポイントではない、という意識があつたんじやないかと思うんです、宋学には。

近藤 はい、はい、宋学にはね。

加地 ですから、『孝經』がまず始めに誰でも心得るべきものだ、というところへ行つたんじゃないかと思うんです。

近藤 この一四頁の、經部の總叙のところですけれども、土曜談話会で油印本で訳注を出しましたのに重大な誤訳をしてますので、私はここで訂正させていただいております。油印本では、經学の限界、經学は訓詁学という限定されたものだ、とい

う訳になつてゐるんです。私が代表者でありましたから、担当者の責任ではなく、私の責任なんですけれども、重大なミスをしておりますね。実はこの本の中で二度ぐらい出して訂正してま

すけれども、『經』つてのは、それこそ聖人の心という清朝考証学が肉迫しようとする、そういう終極にあるものですから、それを『四庫全書』に著録して、やれこの文章下手だとか上手だとか、そんなことを論評するものじゃない、と。だから『四庫全書』には著録しないと。たとえば『易』の繫辭伝の本文とか、そういうものは一切入れない。ただし、繫辭伝に何か注をつけたもの、それなら入れる、と。だから、所詮『四庫全書』の經部に著録されているのは、經注である。經解釈を試みた物ばかりである、經そのものは著録しないと。

加地 なるほど。

近藤 集部へいきますと、杜甫の詩そのものも著録します。だから、『杜工部集』も入れてから『九家注』も入れ『杜詩詳注』も入れる。『九家注』と『杜詩詳注』でやめるつていうのが経

部の処理。決して孔子の『論語』つてのは入れない、何晏の『集解』ならば入れるけれども。そういうことを、これ宣言している。ところが、こともあります。これを大誤訳しまして、經学の限界は訓詁学にある、というふうに訳してゐるんです。

加地 わかりました。それを直しておられるんですね。「もつぱら經解釈をこころみた書物のみとなる」と。それだったら、もつと詳しく説明しておかれないないと。（笑）

第二篇

加地 最初の「吳郡惠氏三代の文学」ですが、このねらいを一言でおっしゃつて頂きましたらどういうことになりますか。

近藤 学人の詩、清朝学人の詩はですね、意外と性靈の詩である。格調では必ずしもないと。「学人の詩・詩人の詩」とは、『思適齋集』顧千里の言葉です。（一三五頁三行）

加地 「世の詩を論ずるもの、以為らく学人の詩有り、詩人の詩有り……」この「学人の詩・詩人の詩」というのはいい言葉ですね。清人のいう学者と現代の学者とでは、意味が違いますから、同じ学者といても、ちょっと学人の意味が、概念が違いますね。教養人でしょ。

近藤 はい。

加地 教養人の詩と、詩人の詩というべきですかね。非常におもしろいですね。

近藤 はい。吉川先生はまさしく学人の詩を作られた。だから

『箋杜室集』というものの中にみるにとん。

加地 ああ。私に下さった詩もそこに一首あるんですよ、私が

留学しましたころの「加地伸行台灣に在り」という題のがちゃ

んと。学人の詩として。（笑）私は文学がわかりませんので、

いろいろお尋ねできないのが残念なんんですけども、この「門外

野風開白蓮」のこところですが。（一五四頁）ここのこところ、發

音を示されて、「緊張に始まつて開放へ、暗黒が解かれて黎明

へと移るのを思わせる」とありますね。ちょっととい説明願えま

せんか。この音調がどういうふうに。

近藤 はあ、いや、吉川先生の音声論とか言われるものなんで

すけど、mén wài（門外）のménは唇をつむつて始まり、w

éも丸くすぼめて始めます。ところが、yé fēng（野風）のyé

はまだ口が細く、fēng辺りから、やや開いてきてそこで小休止、

そしてkai bó lián（開白蓮）のkaiは非常にこう大きく開い

た明かるい音がしきなり措かれて、liánが安定した音に終る。

加地 しかし、wéi-káiもaiは同じやないですか？（笑）

近藤 クー（苦笑）。しかしその次はyéでしょ、これは違います。

加地 yé fēng。はあはあ。しかしその次はkái、その次は古文

風にbóとお読みで。しかし、これ、もし今のやつうの学生が

読んだらkái bái liánですね。

近藤 の方が……。

加地 余計に開放的じゃないですか（笑）

近藤 （笑）案外、王漁洋、北の人ですから、báiと読んでた

かもしかれんと。

近藤 加地、（笑）

加地 この辺は難しいですよね。

近藤 やられた。（笑）

加地 これbóと読んだら口がすぼんでくるんじゃないですか。

（笑）

近藤 参りました。（笑）いや、ちょっと待つて。それ

ばこそ読書音が必要です。「白」は入声ですから、読音のbó

であるよりも更にはbokであつて、読音はまだしもbokに近い。

磨滅した北京音のbáiでは平平平となつていわゆる下三連の病

を起こします。読音で読めばまだしも教われる。いくら開放に

向つた場所でも平仄平でこそ近体詩の韻律が調うわけで、それ

は「開放」にさしつかえません。

これね、私どもが東京帝国大学で支那語を習い、それから古

文、古典を習つた時にね、「白」をbáiなんて読んだらちま

ち無学な者と笑われますよ、てよく教えられたんですね。とこ

ろが、この頃はもう中国の学者がそう読んでいるらしいですね。

だめですねえ。私はもう意固地にね、実は今も学生諸君に「中

国では亡んで日本で保存された古典もある。一つ日本でこうい

う古典の読み方を保存しよやないか」なんてね。

加地 まったく同感です。で、読音の場合は、どういうものを

スタンダードにされますか。

近藤 私は注音符号による『国語辞典』。

加地 中華民国になつて、これは読音とする、これは語音とすると決めた、その線でいらつしやる。

近藤 その発音字典が出ましたでしょ。

加地 『国音常用字彙』ですね。

近藤 はあはあ、あれ標準にして。

加地 それと『康熙字典』辺りですね。私ども阪大の中哲の演習の場合も、訓読したあと、必ず音読させ、私も範読しますが、読音があればしっかり覚えさせています。「我」を「わ」・「他」を「た」というふうにとことん。私も、もう意地です。(笑)

じゃ、次入りましようか。錢大昕ですね。非常におもしろい、こういう人があるというのはもう、大変おもしろい。「『溫柔敦厚』の詩の教えを越えた激しい性情の流露が認められる」

(一七〇頁倒数二行) 錢大昕だけじゃなくて、ほかの段玉裁の場合も戴震の場合もそうですけど、先生のおつしやるのは、何か、その人間が持つていて了感の、その発露と言いますか、そういうものが先ず、こう、現れて出て来るんだというものを見ようとなさつて、そのようにお見受けしたんですけども。近藤 それを、こう皆さんに見て頂いて、清朝考証学の、その古いイメージ、古い言葉たらなんですか、それを除きたいといっている学問なんですよ。で、詩を作らしてごらんなさいと。

加地 よくわかると。その場合ですねえ、そうすると、学はどうなるんですか。学といいますか、論文の方はですね、そこにはその、それはあくまで冷徹な客観的な、そういうもので、詩の場合にそれが出るという…。

近藤 いや、その学の根柢にそういう性情が有るのが清朝考証学だということを、この書全巻を通じて言いたい。

加地 なるほどね。そういう人間が行つて、いる学問というふうに見ないといかんという訳ですね。

近藤 『説文』の注をカッカと書いて喜んでるんじゃなくて…。

加地 わかりました。で、「錢大昕の文学」、これを一言でおつしやるなら。

近藤 文学の根柢は学であると。文学の根柢には学が有る、学が必要であると、経学イコール文学だと。

加地 そこ先生、ご説明いただけませんか、経学イコール文学。

近藤 そこが一番、みなが関心を持つとこだと思うんです。

近藤 私も果して論証できているかどうか自信が有ると言えません。あまり大きな問題からお答えしちゃつたんですけども、直接の問題としては、錢大昕は明の古文辞の流れに好意的な沈德潛に詩を習つて、いる。考証してみると、たつた一年間なんですが、沈德潛の弟子だから錢大昕も格調の詩、という文学

史的な位置付け、それは、
加地 おかしいと。

近藤 違うんじゃないかと。まあ、はつきり言えば、彼の詩はお父さんから習ってるし、それから恵棟はそのおじいさんが漁洋に親炙した人で、恵棟は漁洋の詩に注して「小門生」と称している。そこから錢大昕の詩というのは、やはりむしろ……。

加地 王漁洋。

近藤 ええ、漁洋とも繋がるし、それから友人に袁枚、といいますと、それこそあの『漢學師承記』の中でももう味噌糞ですし、清朝の一流の学者達から歯牙にもかけられなかつたみたいな印象の袁枚と人間的にも親しくしてゐるし、それから、なによりお互いの詩論が相似してゐる。だからその袁枚のああいう生き方、人間性というものを、錢大昕は理解できる人だったと。およそ清朝の詩の歴史の上で、錢大昕辺りが学人の詩の系譜の一番重要な位置にいる人だ、学人の詩の系譜も、恵棟→錢大昕と流れてくるんだとそういうことが言つたか。

加地 ああ、なるほど。文学史的な錢大昕の位置付けを新たにされたところが一番大きなねらいですね。

近藤 私は錢大昕の学問そのものを戴震のようには一向掘り下げないんで、むしろ、いつも戴震のあとに出てきては戴震の補完をしたというような格好で錢大昕が出ています。しかし錢大昕という人は清朝考証学で重大な、それこそ誰も異議ない典型だと思う人で、その人が一方、文学史的にはそんなふうに位

置付けられるんじゃないか、性情あふれる詩を作つてると。で、まだお尋ねございませんけど、彼の「木綿花詩」というのを、この本に入れときましたのも、その実証のためで、それこそ今のいわゆる人民大衆の中へ入つた人である、だから同じ事柄を歌つても人民大衆を客観視して歌つてお役人とはちがう、それを対比すると、錢大昕がいかに性情溢れる詩人であったかという事が……。

加地 はい、わかりました。ところで「家具無多只一身」（一九二頁一行）これは「多く無く」じゃないんですか。

近藤 いや、これねえ、初め学報かなんかに書きましたときは、先生のおつしやるようになつてたんです。

加地 いけないんですね。

近藤 おかしいなと思いましてね。そんなこと言う必要無いですもんね。辛うじて、蓮の実で、生計を支えてる人達でしよう。その人が家具が多いか少ないかでなことを、錢竹汀先生が、ここで詩に歌うはずは無からうと、はつと気が付いた……。

加地 先生、これは注が要りますよ。

近藤 そうですよね。これ、そのままにしておくと……。あるいは「無多」は口語的な表現で「ほとんど無い」ことを云うようで、「家具 無多くして」とでもしたらよかつたかもせんね。

加地 えっと、さつきのところに戻るんですが、「轉益多師、滌淫哇而遠鄙俗」、それは「詩之識也」だという（二〇一頁）こ

の「轉益多師」。たいへん分りにくい。先生、どうですか。

近藤 私の『唐詩集の研究』のですね、七一页に引いておりますが、これはあの、有名な、杜甫の論詩絶句の初め、論詩絶句と題しておりませんけれども、「戯れに六絶句を為る」という、これが論詩絶句の草分けになるわけなんです。その最後の第六首目に見えるのですね。

加地 これ、わかりにくい言葉です。「袁枚の『隨園詩話』に云々」とあって、その中でですね、この「識」とは何かと。

「假に錢氏の説明によつて理解するならば広い学識によつて生まれる洗練された上品さを言うのであろう」(二〇二頁倒数四行)、とありますので、見てみたらこの「轉益多師」。下句はわかりますよ、「滌淫哇而遠鄙俗」。しかし上句は何であろうと思つて。(笑) それですね、一生懸命考えたんですよ、この四文字がわからぬ。意味がねえ、どう読んでもね。で、これはと思って調べたら杜甫の詩らしいんですが、この対談でもう時間切れたもんですから、先生とこへ電話でお話しして、杜甫の詩ではないでしょうかと申しあげました。

近藤 よくご注意下さったと思うんですね。だから慌てて見直してきたんですけども、沈徳潛がこの詩を『唐詩別裁集』に収めてまして、沈徳潛曰くね、「焉不學」之意(いすくにか学ばざらんやの意なり)と、論語の三字をもつてきましてね。だから、どこだつて勉強できる、なんでもお師匠さんだと、そういう意味に沈徳潛は解釈してますね。

加地 うーん。

近藤 私、論文と言わば、何と言わば、原文引き放しといふことは、絶対しないんですね。唯一してるのが、こゝだつたんです。

加地 そうですか。(笑)

近藤 そうすると、おかげでね、例えば、その近くにある「放筆」という言葉ね。

加地 「放筆」、はいはい。

近藤 「筆を放てば」、これ、やはり杜甫の詩なんですね。

加地 はあ、そうですか。「放筆千言」。

近藤 それから「灑を揮う」、「揮灑」という言葉ござりますね、「放筆千言、揮灑自如」と。

加地 はいはい。

近藤 その「揮灑」、これも杜甫の詩ですねえ。それで慌てましてね、これ全部杜甫かと思ったら、さすがにそうはいきませんけどねえ。その「経を含む」、「含經」、これは文選の任の「王文憲集序」です、ええ。その次の「咀史」、「史を……」

加地 「読む」ですか。

近藤 これは、なんとまあ、「咀む」、「史を味わう」。これだけ」さいませんでしたけどね。あつそだ、「無一字無来歴」この「一字として来歴無きは無し」はですね、僕の記憶ですけども、黄庭堅が杜甫の詩を評した言葉なんですね。だからねえ、徹頭徹尾、杜詩でやつてる。

加地 なるほど。

近藤 お電話のおかげなんです。いやあ、やっぱりこれは、一
頁ぐらい使って、中身を解説しないと。

加地 そうですね、それが一番。これは詩論でしょ。「シ」で
歴史の「史」と、ポエムの「詩」と、両方の問題有りますから
ねえ。

近藤 なるほど。史論に詩論を重ねてるんですね。

加地 そうなんですよ、ものすごく重要な文学論なんですよ、
これは。だからここを、出抛に詳しい近藤先生ともあろう方が
ですね（笑）。私はここでつまずいた訳ですね。（笑）それか
ら、この二二一頁、いよいよ、「木綿花歌」のとこですけども、
この詩、おもしろい詩だなあ。詩自身が非常におもしろいです
が、も一つおもしろかかったのはですね、この詩の近藤注ですよ
ね。（笑）

近藤 はあ。

加地 これこそ考証学ですよ。（笑）何と申しますか、先生が
植物のこと、かんかんになつて調べられたんぢやいますか。こ
れ、もう必死になつて。（笑）

近藤 そう言つていただけのおかげで、思い出しましたけれども、
これ、私ですね、錢大昕の詩に、清儒が注したらどんなんふうに
注すだらうかと、それを意識してこの注をかいた訳です。そし
て、その自ら作りました注に自ら疏を、これは日本語で書いた
訳です、はい。

加地 現代の学問も駆使しながら。（笑）この辺りは孫詒讓で

すよ。（笑）

近藤 いや、お恥しいです。

加地 本当は、マルキストなどは、こういう詩をカッチャリと読
むべきですねえ。こういう問題の持つているものを取り上げな
いと、マルクシズムの観念だけではね、どうしようもない。じや、
先生、次の震震に入りたいんですけど、いよいよ震震の、本番中
の本番というところへ来ましたが。先生、ラショナリズムとい
う問題。ヨーロッパ人は感覚的世界が先ず根本にあって、次は
知性と言いますか悟性と言いますか、その世界が有つて、その
上に、神を見る理性の世界が有ると、こう考へてるんですね。
ですから大体、ラショナリズムという場合には、神を見る、そ
ういう最高の智慧、位置づけとしては、神を見る目のようなも
ののようですねえ。

近藤 へえ。

加地 はあ。しかし近代では正に、知的な合理主義というこ
とになるわけです。その意味では中国人も、物を見る目とい
う意味では一緒じゃなかつたかと思うんです。だから中国人は、
神を見る目の特別な働きというものが人間の頭の中にあるかど
うかというようなことは、別に意識してなかつたんじやないか
というふうに思うんです。この辺りは、文学の問題というより
は、思想の問題になつてくるかと思うんですね。

近藤 ここ素人のあれですから、是非ご修正を。

加地 いえいえ、で私ちうと思ったのは、もし西洋人がラショナリズムだつたら、何もかも本国に取りこんだ中国人は、ナショナリズムじやないかと。（笑）

近藤 はあ、うまい。誤植じやないかと思つたんですけど、やっぱり「ラ」だつた。（笑）

近藤 最高！高度な落語。（笑）すごい。

加地 さて「戴震の『考工記圖』」ですが、すぐおもしろかっただですねえ。これ、先生、会心の作やつたんやないですか。この御本のハイライトがここにあるように思つたんですけども、どうでしようか。

近藤 ありがとうございます。実は当時、佐伯有一さんが『史学雑誌』の「回顧と展望」（一九五五年）を書かれて、本年度論文中の白眉であるという過分のお褒めを頂いたものがこれであつて、忘れられないんです。

加地 この論文の場合ですね、いわゆる資料的な意味のものは、そんなに先生ご引用じやないんですね。しかし、非常に本質的な所、お読みとりになつていらしやる。この論文、何と言いますか、非常に感銘を受けました。非常に得る所多かったです。

近藤 ありがとうございます。これはやっぱり少ないんですね。これをそういう風にわかつて下さる方は少ないと思つてゐんです。

加地 そうですか、はあ。で、「歴算学を学ぶことが、実証的

な学問、漢学に志す学徒のあこがれとなつてゐた当時では云々（二七八八頁倒数二行）とありますね。ここには、漢字と清朝考証学との関わりという大きな問題がありますが、ただですね、この漢代の学問にはもう一つ、オカルト的な要素もありますね。

近藤 ああ、大いに……。はいはい。

加地 それはどうなつてんでしよう。オカルト的な所は、清朝の学者、どういう風に考えたんでしよう。

近藤 はあいや、そこをその一生懸命、安居香山さんの例の。

加地 先生は緯書を考証の資料に取りこんだとおっしゃつてられますね。しかしそれは結果であつて、やっぱり漢代自身の持つているオカルト性。例えば易の解釈にしても、奇つ怪な解釈をするわけですねえ。ですから、清人が漢学をモデルにした、漢学の訓の学というのを取り入れた、これはわかるんですけども、經学以外の所で渦まいていたオカルト、鄭玄にもその要素なしとしないですよね、緯書をどんどん取り入れてんですから。その辺はどうなんでしょう。

近藤 これ逃げるみたいですが、漢学という言葉が非常に不思議でござりますね。言われてみれば。

加地 「漢学」を削つて「実証的な学問に志す学徒のあこがれ」の方がいいでしようね。

近藤 いつか楠山春樹さんが協同研究の最中に「近藤さん、あんたそういうこと言つんなら漢学という言葉使いなさんな。經学と言ひなさい。」て言われたことがありまして、今もそれ思

い出しますけども……。

加地 ああそうですか。なるほどね。わかりました。

近藤 はい、非常に不用意。でもこれ他の人だつたら、読み過ごしてくれるでしょうけどね。

近藤 いいええ。それから先生、『蛾術篇』（三四四頁倒数一行）の蛾子ですね。それから「沈櫻園」（三四五頁七行）の「沈」ですね。それから「吉士とは、戴震、特別に翰林院庶吉士を賜つたのによる」（三四五頁六行）というあたり、非常に親切な書きかたです。

近藤 そうですね。これはやっぱり、学生相手に長年講義持たせて頂いたおかげですね。

加地 なるほどねえ。それが専門家も、さつきありました「百」や「白」を、古文ではbのと読むんだというようなことを常識としない人が増えてきてるでしょ、最近。ですからこれは先生、そういう意味で非常に親切な書物であると思つたんですよ、ええ。

近藤 ありがとうございます。それとね、僕、逆にやっぱり教育された。吉川先生の学を。分りやすくする、ということ。加地 師法をちゃんと。やっぱ戴震と段玉裁とですよ（笑）。それで実証主義問題（二九八頁）ですね、実証精神と言つべきでしようかね……。それの方が多いんじゃないでしょうか。

「実証精神」と言う方が。

近藤 「主義」なんて言うより。

加地 「実証精神」の方がずっといいですね。実証主義いうたら一つのイデオロギーでしょう。それは、キリスト教の神学を

乗りこえようとするイデオロギーですからねえ。

近藤 恐い。

加地 実証主義は歴史的のある限界を持つているもんですからね。限定を持つてますから。中国研究者はよく実証主義と言いますけど、ヨーロッパの実証主義とこつちやになつてややこしい。「封建制」いうことばの場合と同じですよね、ヨーロッパの封建制と周代の封建とがこつちやませになつて。で、三〇三頁の一番最後の行ですが、「經に亞ぐもの」つまり第二次的な古典で、実はきわめて有意義なもの云々」ということですが、これどうしてこういう意識になつたのか、ちょっととこ説明頂けませんか。

近藤 あ、戴震・段玉裁を通じてですね。気がついたおもしろい見方で、結局、我々漠然と經と見てましてもですね、その中に、經のものとここで言つた經に亞ぐものとがあると……。それを見事に見抜いてしまつていて、彼らは。特に戴震の場合、そうだったと……。それで經に亞ぐものの場合に、我輩がそれに注を作るなり、あるいは何かそれを引きたてるような著述を作ることによって經まで高めてやるぞと……。少しも言わんけれどもそういう意識があつたと。

加地 それはおもしろいですねえ。それは先生のこ発見……。

近藤 ええ。

加地 これは先生もう少し声を大にしておっしゃつたらいかがでしょうか。

近藤 いや、だいぶあちこちで……。

加地 そのことと関わりますが、書き方の悪いところはですね、近藤光男説ということがはつきりわからないところがある。

近藤 それは悪いことですね、確かに。（笑）

加地 そうです。これはいけませんね。（笑）つまり読者としてはですよ……。

近藤 意気投合しちゃいけない。（笑）

加地 （笑）読者としてはですよ、私が例えば他に引用する場合ですね、近藤説として引用できるのかどうかがわからんから困りますよ。

近藤 これは言い訳ですが、やっぱりこれは我輩が初めて言うんだとかね、我輩の発見だっていう風な書き方はしたくない。だからそう言わないでわかるようにするにはどうしたらいいんでしょうか。

加地 いや、やはり「私は」と言うべきです。それから先生、三一二頁に稿本と版本とを並べてお書きですが、我々中国学関係の者は稿本で研究する機会が少ないんですよね。

近藤 そうですね、ええ。国文の人はすごいですけどね。

加地 国文のアカデミズムは、ほとんどそなはつかりですねえ。

中国では刊本がでてしまふと、稿本なくなつてしまふんですねえ。ここんとこ国民性の違ひみたいなもの感じます。

近藤 北京行つてね、図書館にもぐりこんでね、段玉裁の稿本があつたと。『説文解字注』の前の、いわば『説文解字注』の長編みたいなものがあつたといってねえ、ああもう一生懸命探して下さいまして。そういうのに敬意は表しますけどね、段玉裁の身になってみたらね、俺の下書きそう見んでくれと。俺はちゃんと刊本を出してあると。ちゃんと公刊したもので見てくればと。例えは早い話、私、下書きがいっぱい家にありますけども、死んだ後で誰かがそれひっくりかえして原稿は前にこういの書いておつたてと見つけるの、それはあんまりよくない。

加地 （笑）はあ、舞台裏は見せんと……。表芸の舞台の方を見よと。それわかりますねえ。私、書斎には人を入れないですよ、絶対に。

近藤 入れたくないですねえ。

加地 入れたくないですねえ。（笑）

近藤 死ぬまでに焼くことですな。（笑）

加地 （笑）そうです。舞台裏があるんですよねえ。これは見せないですよ、やっぱり。血と汗と涙とで得てきたものをね、そう簡単には。（笑）

近藤 研究の頂点をのみ押さえて書くと。これで俺を知つてくれというよな、そういう心境で。

近藤 そう美学。そういう美学に対し、稿本引つぱり出してきてね、この字は注釈してたとか、あの字は注釈してなかつてます。

加地 美学、美学だ。

近藤 そう美学。そういう美学に対し、稿本引つぱり出してきてね、この字は注釈してたとか、あの字は注釈してなかつてます。

たとか、それやられたら段玉裁は俺の学問がわからなくなるじゃないか、と言いたいんじゃないかと……。いやただ、いつもそううだとは申しません。この場合なんか、なかなかおもしろい。

(笑)

加地 そうですねえ。やっぱしおもしろいですねえ、稿本があると(笑)。書き直して書き直して(笑)。どっちに味方するかわからん。

近藤 (笑)いや、本当に眞実……。

加地 我々、やっぱり稿本を使う機会が少ないもんですから非常におもしろかったですね。だからここにこうあるじゃないですか、「この自然な感情の筆端にあふれ出たままの稿本の姿に、人間震震の(笑)存在を身近かに感じることができる」と(三一五頁六行)。これ先生ご自身がお書きですよ。やっぱり稿本いりますよ(笑)。稿本をつつきまわしたら何かその……。第

一ねえ、筆端にはある程度やっぱり性格が。神経質な感じの筆やら、豪快な筆やら。稿本は珍しいですから、こういうのはおもしろいですねえ。(次号につづく)

後記：この対談は、平成元年三月一日(水)、東京の学士会館において行なった。『清朝考証学の研究』を出版した研文出版の山本実氏が同席、午後一時から五時二十分まで対談した。その録音テープを、大阪大学文学部中国哲学研究室(佐藤一好、藤居岳人、矢羽野隆男、湯城吉信)において四百字詰原稿用紙約二六〇枚に写しとった。その後、近藤先生と私とが協力して約八十枚に修訂した。上下二回に分載する。談論風発し、冗談が飛び交い横道へそれはもどる雰囲気をすべて収録できないのは残念であるが、ノーカット版テープは、近藤先生ならびに弊研究室がそれぞれ蔵有している。(加地)